高山の文化を高めた人々 34

瀧井孝作に敬愛された池之端惣助

池之端甚衛

池之端惣助について、作家の瀧井孝作は、その代表作『俳人仲間』のなかで、

「川上問屋に顔出された旦那衆の中では、私は、池之端村長が一ばん好きであった。（中略）池之端村長は、長身丈夫で耳柔の血色のよい色白の温顔で、私ども丁稚小者にもわけへだてなく話をされて、私は子供心にも立派な人と思った。」

と書いています。

池之端惣助は、安政五年（一八五八）元旦、大野郡大八賀郷山口村（現・高山市山口町）の父・池之端甚兵衛と、母・高山町二之町の川上魚問屋の長女・武羅（むら）の長男として生れました。

惣助は、非常に短気で、激し易い性格だったため、これを心配した両親は、八歳の惣助を高山町の山田秋籟の漢字塾へ通わせ、七年後には、美濃・池田郡本郷村・光慶寺の稲葉五雲の塾へ預け、漢学を学ばせました。

明治七年（一八七三）三月、筑摩県第二十五区の山口村に、「森下学校」が創立されることになって帰郷し、十六歳で助教諭として採用されました。

瀧井孝作は、この後の惣助について、

「《この人は、明治十八年に二十七歳の若さで大八賀村の村長に推されてから、長年三十年間も勤続の名村長、大野郡の郡会議長・岐阜の県議会議長にも推されたりして、一生涯地方自治に尽した人で、大正五年に、村役場の部下が信用組合の金を費消した旁（かたわら）で検挙されて、村長は責任をとって、五十八歳の十一月十八日未明に、先祖の墓所で自害された。私は、この最期について、『責任自殺』の題で二十一枚の短篇に書いて、昭和十年十一月号の中央公論に出したが…》」

と書いています。

惣助は、斐太中学校の開校、飛騨電灯合資会社の設立、高山線の建設促進などに関わったほか、植林・養蚕・産馬などの奨励・振興に努めた自治功労者として、明治三十六年（一九〇三）藍綬褒章を授章しました。

惣助が亡くなる前後の池之端家は、長く病床に臥す妻、若くして夫（惣助の長男）を亡くした嫁、その長男の五才になる孫の合わせて四人の女子供ばかりの家庭でした。

福田夕咲は、その著作『池之端惣助翁伝』（大正十二年刊）のなかで、この時期の惣助について、

「翁の事業、翁の心の悩みに対して真に理解し、相談相手となるべきはなく、村政を見終って家庭に帰る時、翁の心裡には、恐らくある一抹寂寥の感なきを得ず、この寂寥の想が翁をして益々愛郷の念を濃やかならしめたに相違ない。」

と書いています。

惣助は、こうしたなかで大正三年、岡村利平、押上森蔵が創立した「飛騨史壇会」に評議員として参画し、『飛騨史壇』の発行にも物心両面で協力しました。大正四年に、「飛騨史壇会」が主催した「歴史夏期講演会」の講師を囲んだ時の写真があります。

この写真には、明治・大正・昭和初期の「飛騨の史学・文化」をリードした岡村利平、押上森蔵、福田吉郎兵衛、戒能斐太中学校長、住廣造の諸氏等と共に、惣助も写っています。惣助が亡くなる一年前のことです。

「飛騨史壇会」のメンバー　大正4年　於：東照宮（前列左端が惣助）